

Title	ステファヌ・マラルメ「ゴシップ1875-1876」『アシニアム』(1)(翻訳)
Sub Title	Stéphane Mallarmé : "Gossips 1875-1876", Athenaeum (1) (traduction)
Author	Mallarmé, Stéphane(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.52 (2011. 3) ,p.83- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20110318-0083">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20110318-0083</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ステファヌ・マラルメ

## 「ゴシップ1875-1876」『アシニーアム』(1)

### (翻訳)

原 山 重 信

0. 1875年10月18日 — 1875年10月23日

夢幻劇とオペレッタの席卷によってパリの殆ど全ての舞台から〈悲劇芸術〉自身が排除される恐れが出ている。「フランス正劇」、これが新演劇の名である。というかむしろ、坐るべき劇場はまだ確かに定まっておらず、5箇月の演劇シーズンが担う祈りが退けられるかもしれないのだ。この企画は『自由』誌の卓抜な批評家、ラフォレ氏によって考案され、運営されており、この一人の長が周りに全共感を集めている<sup>1)</sup>。見事な劇作品も不意に現れた。韻文では、フランソワ・コペの「詩篇集」であり、恐らく『ド・マントナン夫人』というタイトルになるだろう。散文ではカチュール・マンデスの『母親は敵同士』とエミール・マラス<sup>2)</sup>の『敷居の門番』で、いずれもまぎれもない大ヒット作である。これが皆まだ公式に告知されているわけではない。しかし、パリに残された絶対的な驚きは、「フランス正劇」が、伝統をよりよく結び直すために、一幕の韻文正劇、ヴィクトル・ユゴーの『剣<sup>グレイヴ</sup>』と共に開くことになるということだ。この偉大な詩人の作品が舞台にかけられるのは、再演を除いて、ちょうど40年ぶりである。

★

雄弁家にして作家のド・ラポムレイ氏<sup>3)</sup>は、『フランス』誌で行っている週刊演劇研究の傍ら、1874年の冬の間に創始された自身の「話す連続ドラ

マ」を再開している。パリでは、現代の主要な批評家の一人によってなされる、前日見た作品や翌日見る作品に関する評価を聴くために、選ばれた大衆が毎月曜1時間、カピュシーヌ大通りの講堂を埋めるとというのが、芝居ものへの万人の趣味である。ド・ラポムレイ氏は、当を得た計画だが、月に一度パリでの成功をブリュッセルに持ち込もうとしている。



頗る著名な座談の名手、サルセー氏<sup>4)</sup>は、『現代』誌の人気絶頂の演劇欄に、パリだけではあるが、「一週間の書」に関する講演も加えようとしている。目覚ましい革新である。何故なら、公衆は見世物の選択だけでなく、読書の選択に関しても知りたいからである。



オデオン座は、この冬ゲーテ座で行いたい昼興行で、詩人ルコント＝ド＝リールの「復讐の女神たち〔1873〕[ママ<sup>a)</sup>]」というアイスキュロスの〈正劇〉を再演するだろう。マスネの新しい音楽——殆ど一枚の譜面——とバレエが古代の舞踊を表しており、演出をその文学作品の高みに置くために、そしてこれらの上演を古代の想起にも現代芸術の祭式の一つにもするために、なおざりにされるものは何もないだろう。



オーギュスト・ヴァクリー氏は、その有名な書『肖像と洪面』〔1856〕に『今日と明日』〔1875〕と称する書を加える。今日の全世代がこれらの作品のうちの前者から彼の批評的素養を汲み取ったものだった。そして後者は、もっと政治に特化したものではあるが、極めて巧みな文学的調子でそれを実現している。前者がかつての『状況』紙の学芸欄の文集だったように、後者は『喚起』誌の社説の選集である。

- 1) このヴォードヴィルの席卷に対する、偉大な英雄的正劇の復権の試みはやがて、『文芸共和国』誌が、サルセーとラフォレの協調を呼びかけつつ、第1号

(1875年12月20日)の中で伝えるであろう。

- 2) ジャン・マラス (1839-1892) 時にはエミールという名を冠する。コペーやマンデスと同様、マラルメの近い友人であった。
- 3) アンリ・ベルダール・ド・ラ・ポムレイ (1839-1892) ジャーナリストで、劇評家。
- 4) フランシスク・サルセー (1828-1899) 『現代』誌のコラムニスト。
- a) マラルメが書いた ‘Érynnies’ という綴りが間違っており、‘Érinnyes’ が正しい。

## 1. 1875年10月 — 1875年11月6日

(芸術ゴシップ?)<sup>1)</sup>

I (a) 文学者のデッサンは、オランダか日本の用紙に、個々の語からも文の美しさからも独立した映像が、生身で、詩人や小説家の精神に、どのように提示されるかを見たいと思う読者にとって、常に例外的な魅力をもっている。(この段落が長すぎたらカットして下さい。) ヴィクトル・ユゴー、ボードレー、ゴーチエ、そしてシャンフルーリが、1年前に或るアルバム<sup>2)</sup>に芸術上の共同を成し遂げた。このアルバムには、ゴンクール<sup>3)</sup>の2人の兄弟の一方によって書かれた彼自身〔ジュール・ド・ゴンクール〕のもう一つの肖像が掲載されているが、死が仕事途中で栄光にあった彼をあの世へ連れて行ったのだった。後に残されたエドモンは、間もなくジュールのエッチングを20ほど刊行するだろう。ジュール自身の原作もあり、18世紀、19世紀の人気のある巨匠たちの原作に基づいて書かれたものもある<sup>3)</sup>。2人の偉大な小説家の知的な読者は、一面で『ジェルヴェゼ夫人』、『尼僧フィロメール』<sup>4)</sup> [ママ] などを与えた才能が、エッチング画家の才能にいかにも似ているかを知っている。それに、この作家兄弟が、常に、千回となく彫琢を重ね、生き生きとした作品を相次いで生み出したことも知っている。配本の本文はビュルテイー氏<sup>5)</sup>に託されている。そして予約によるその作品は、ドラグラーフ社にも芸術書房にも属する。

- 1) この断章は、『アシニーアム』1875年11月6日号、p. 611-612に殆ど全文、一部手直しの上、「文学ゴシップ」として掲載された。——括弧内の文字 (a) 『ア

シニアム』の改行の順序を示す。これはマラルメが送付した順序としばしば異なる（後出、p. 81〔ページは原著のまま。以下同様。〕、英文テキストを見よ）。カギ括弧内の日付〔本翻訳では、各記事の上に付された日付のうち、一の前の日付を指す。一の後にあるのは、実際に『アシニアム』誌に掲載された日付である〕は、マラルメが記事を送付したと推定される日付である。

- 2) 『7つの文人デッサン、ヴィクトル・ユゴー、プロスペル・メリメ、エドモン、ジュール・ド・ゴンクール、シャルル・ボードレル、テオフィル・ゴーチエ、シャルル・アスリノー』、アグラユス・ブーヴェヌ複製、シャルル・アスリノー、フィリップ・ビュルティエ、アレクシス・マルタン、P. マラシ、モーリス・トゥルヌー著。70部印刷、うち50部のみ販売。パリ、ルーケット社、1874、二つ折判、8p., pl. B. N. : V. 5759.
- 3) 『ジュール・ド・ゴンクールのエッチング。フィリップ・ビュルティエの解題、作品目録』。パリ、ドラグルーヴ社、1876、二つ折判、XVIII-19p., fig. et pl. B. N. : V. 4461.
- 4) 『尼僧フィロメヌ』（『アシニアム』誌は「フィロメール」という誤りを踏襲している）1861年刊行。『ジェルヴェゼ夫人』は1869年刊。
- 5) フィリップ・ビュルティエ（1830-1890）。『文芸共和国』の美術批評家。ゴンクール兄弟の友人で、或る印象派画家に関する小説『大いなる過失』（1880）の著者。マラルメの友人。

## 2. 1875年10月 — 1875年11月6日

（文学ゴシップ）<sup>1)</sup>

I (b) 長編小説と短編小説については、新刊と再版によってシーズンが開幕する。『パリの奥方たち』は、半ば物語、半ば新聞記事のこれら<sup>フアンテジニ</sup>幻想的作品集のうちの一つの選集で、或る詩人<sup>2)</sup>によって取り扱われる時かくも特別な価値を帯びる。この場合、その詩人というのは、『口づけ』と『ハーレム』の作者、エルネスト・デルヴィイ氏である。——『月曜物語』は、読者層並びに殆ど全ての家庭で知られており、かつてチャールズ・ディケンズを虜にしたこの若き巨匠、アルフォンス・ドーデ氏の作品である。元の本のページに、同じ著者の『或る不在者の手紙』<sup>a)</sup>から取った別のページ（そこからは一切の政治色が削除されている）が付け加えられている。最後に、お決まりの時期だけでなく、全季節で、夏でさえも読まれ得る種類の、3つの〈クリ

スマス物語〉が来る<sup>3)</sup>。——現代小説を殆どそっくり扱っているシャルパンティエ文庫は、これら最新作を提供する。そして、この冬の大事件、ゾラの長編『ウージェーヌ・ルーゴン閣下』の出現を我々に予告しているのも同文庫である。これに関して、政治的な理由で遅れている出版に幾ばくか先駆けて、ここで詳しく述べておこう<sup>4)</sup>。この巻は広範囲に互る風俗の研究を形成する連作『ルーゴン・マッカール家、第二帝政下における一家族の自然社会史』を継承する。既に『ルーゴンの運命』、『饗宴』、『パリの胃袋』、『プラサンの征服』、『ムーレ神父の過ち』がその中に含まれており、いずれも、予告された書を十分味読するためには是非読んでおかなければならない値打ちのある書ばかりである。そして、そのうちの二傑作は恐らく『饗宴』と『ムーレ神父の過ち』であろう。小説家ゾラの名声は、ロシアでも、フランスとはほぼ同じくらい高まっており、既に大部になっている彼の作品は、いつの日かイギリスに驚異を巻き起こすだろう。

- 1) 『アシニアム』1875年11月6日、「文学ゴシップ」、p. 611-612を見よ。英文テキスト、後出、p. 81.
- 2) マリー＝エルネスト・デルヴィー (1839-1911)。詩人、小説家、劇作者。多作だが、彼の作品は今日では多少とも忘れ去られている。『口づけ』は1872年、『ハーレム』は1874年の作。マラルメは『最新流行』(『全集』、〔旧〕プレイアード版、p. 803. p. 721, 822も参照)を見よ)の中で、『ハーレム』を才気煥発に註釈している。エルヴィーは『最新流行』第4号に「詩篇」を発表し、同誌に参加している。『文芸共和国』誌にも第2号から寄稿している。
- 3) 『月曜物語』は初めルメール社から1873年に刊行され、『或る不在者〔へ〕の手紙』は1871年同様にルメール社から出た。
- 4) ゾラに関しては、後出の「ゴシップ」24番、29番を見よ。
  - a) この作品は、『*Lettres d'un absent*』となっているが、私の調査に拠れば、『或る不在者への手紙』(*Lettres à un absent*) (1871年刊)である。

### 3. 1875年10月 —— 1875年11月6日

(文学ゴシップ)<sup>1)</sup>

I (c) 『テオドール・ド・バンヴィル全詩集』のエルゼヴィール小復刻版は、

魅力的なサイズと活字のゆえに決定版であるだけではない。殆ど各巻が、出版されると同時に、彼の最も注意深い読者にとってさえ、〈巨匠〉の全く新しい部分をもたらしてくれる。『西方詩集〔西洋の女たち〕』<sup>2)</sup>という1冊がちょうど刊行されるところだ。(ヴィクトル・ユゴーのあの『東方詩集』との刺激的な対照を示す) その表題の下、『新綱渡りのオード集』が全て並んでいる。このフランス的で、熱狂的な賑やかさの噴出の後、同書では、二つの全く未完の選集が来る。一つは、『黄金の脚韻』、即ち、『亡命者たち』<sup>3)</sup>の有名な登場以来書かれてきた詩群と、詩人〔バンヴィル〕が次々とヴィヨンのバラードとトリオレについてしたのと同様に、復権させるシャルル・ドルレアンが好んで用いた古い叙情的なリズムの喚起である『ロンデル』である。——ド・バンヴィル氏は、次にここで語られることになる二つの韻文劇作品を書き終える<sup>4)</sup>。

- 1) 『アシニアム』1875年11月6日、「文学ゴシップ」、p. 611-612を見よ。英文テキスト、後出、p. 82。
- 2) 『テオドール・ド・バンヴィル詩集 西洋詩集、黄金の脚韻、ロンデル』、パリ、A. ルメール社、1875。
- 3) 『亡命者たち』はドゥオダंक社から1867年に刊行された。
- 4) 『デイダミア、3幕12音綴詩行による喜劇』(パリ、オデオン座、1876年11月〔初演〕)、パリ、A. ルメール社、1876、及び『真珠、1幕韻文喜劇』(パリ、イタリア劇場、1877年5月17日)、続いてシャルパンティエ社から初め『テオドール・ド・バンヴィル喜劇』(1879)の巻に収められた。恐らくこれらの作品のことであろう。

#### 4. 1875年10月 —— 1875年11月6日

(芝居ゴシップ)<sup>1)</sup>

(この段落が長すぎたらカットして下さい。)

I 美しい演劇のフランスにおける将来に興味を寄せる人は誰でも、権威ある批評家ラフォレ氏<sup>2)</sup>によって企画、運営されるこの芝居の高尚な試み、「フランス正劇」のキャンペーンが勝利を収める有為転変を、注意深く追いかけないわけにはいかない。堂々たる作品はパリの広いホールを持つ興行主

が不足しているように思われた。作品をもつ興行主には、ホールがなかった。長い間切望していたイタリア劇場は、5箇月間悲劇役者ロッシ<sup>3)</sup>の天才のものである。シャトー＝ドーはもう空いていない。一時的にアテネ座の小さな小屋<sup>4)</sup>に甘んじざるを得なかった。しかし舞台装置の巨匠たちによる背景が舞台を深く極め、さらに特別な出演契約で結ばれた今日の最良の役者たちの芸も舞台を大きくするだろう。既に始まりの準備ができていた社交界の、そして文学好きの〈初日〉の観客は、フランス座も羨むようなものになるだろう。プログラムは、当然大ホールが空くまで変更される。そこでオーギュスタン・ティエリー甥<sup>5)</sup>の『ヘンリー八世』のような最近認められた4幕か5幕の劇や、ここで予告したコペの『ド・マントノン夫人』、そしてカチュール・マンデスの『母親は敵同士』のような演目は、まずもっと短い作品に席を譲ることになるだろう。その小品の中には、最後に挙げられた著者〔カチュール・マンデス〕による並外れた散文作品『正義』もある。マラスの『敷居の門番』に関しては、この全く新しい性質の3幕をもって、「フランス正劇」が開幕するはずであり、恐らく目覚ましい成功を収めるだろう。——ヴィクトル・ユゴーの一幕悲劇『刀剣』<sup>グレーヴ</sup>は、同じく短編の喜劇『祖母』と並んで、〈巨匠〉の原稿の中にまだ暫く残ったままだ<sup>6)</sup>。

- 1) これは、『アシニアム』誌が取り上げた芝居に関する稀な断章の一つである。1875年11月6日土曜日の「芝居ゴシップ」、p. 618を見よ。英文テキスト、後出、p. 82。この断章は簡略化されているが、それは他の断章とさして変わらない。
- 2) ラフォレ氏の芝居と「フランス正劇」の歴史家たちが何を知っているのか？『文芸共和国』誌はしばしば彼のことを話題にする。1875年12月20日に、ジャック・ロランは「ラフォレ氏は初めに、そしてそれは真の栄光であるが、この「フランス正劇」という観念と言葉を大衆の中に投げ掛けた。彼は自分の周りに若い劇作家たちとやる気のある芸術家たちを糾合した。彼に欠けているのは、残念ながら劇場である。だが、障害が突き動かしてくれるような人々から、場所は入手できるだろう。もしもの時には、サルセー氏のお墨付きの言葉の助けによって、自ら建築するだろう。彼は必ずや目的を成し遂げるだろう。そしてやがて、我々は「フランス正劇劇場」の開幕を告げることになるだろう。」(p. 33)と書いていた。1876年12月27日、ジャン・プルヴェール(カチュール・マンデスの偽名)は、ラフォレにアンビギュ座の支配人という名称を冠していた。1877年1月28日、この劇場の再開と、ここに「正劇」の避難場



所を与えるというラフォレの意向が告げられていた。1877年3月3日、カチュール・マンデスの3幕正劇『正義』が初演された。

- 3) エルネスト・ロッシは、1875年11月20日に出た「ゴシップ」の主人公である。舞台芸術の復興の旗手となったイタリアの悲劇役者。後出 p. 87 を見よ。
- 4) 「アテネ座」の話は、ラフォレ氏の試みを物語るものではないように思われる。
- 5) 偉大な歴史家の甥である〔同名の〕このオーギュスタン・ティエリーは、1845年生まれで、主として長篇小説を書いた。彼の戯曲『ヘンリー八世』は知られていない。自身、歴史家にして小説家。『文芸共和国』に寄稿することになる。
- 6) ここに引かれた作品はいずれも、1875-1876年のシーズンに、アテネ座で上演されなかった。序詞付き5幕韻文正劇『ド・マントノン夫人』は、1881年4月12日、オデオン座で上演され、同年ルメール社から出版された。3部正劇『母親は敵同士』は、1882年11月18日、オデオン座で上演され、1883年、ダントゥ社から刊行された。マラルメは『最新流行』にこの作品を引いている（『全集』、旧版、p. 769を見よ）。1877年3月3日にアンピギュ座で上演された『正義』が刊行されたのは1908年になってからであり、ファスケル社のマンデス『全集』の「散文劇」の巻に収められた。ジャン・マラスの3幕作品『敷居の門番』は上演も刊行もされずにいたように思われるが、恐らく1872年か1875年にマンデス家で読まれたであろう。マラルメの未刊書簡（マラルメ『書簡集』の第2巻に掲載される〔同書、p.35を見よ〕）では、或る不明の受取人がマラス作品の朗読に招待されている。『祖母』<sup>エベ</sup>は1886年にヘツェル社から『自由劇場』の中に、『剣』<sup>グレーヴ</sup>（恐らく、これが『刀剣』）のことであろう）と共に収められた。

## 5. 1875年11月7日 — 1875年11月13日

### 文学ゴシップ<sup>1)</sup>

II (a) V. ユゴーによってなされる出版は、たとえ数ページであっても、パリでも他処でも、常に反響を呼ぶ。各人が最近、『喚起』<sup>ラベル</sup>紙の中で、出版が近いと察知できた時でさえも。今度の小冊子は「亡命とは何か」と題するものであり、これは「亡命以前」の続きで、「亡命以来」の前に置かれる「亡命時代」への序文となる。題名の悲しくも気高い単調さよ<sup>2)</sup>！ 詩人がフランスに帰って以来、自ら、その本当の趨勢と共に、彼の人生の諸々の出来事を記録しているこれら貴重な書のお蔭で、後代の人々は、過去の幾人かの偉人たちやシェークスピアの場合のように、曖昧さや誤りに晒されることはな

かろう。それどころかヴィクトル・ユゴーについて、現代と同じように、その人柄と天才を知ることになるだろう<sup>3)</sup>。

- 1) 『アシニアム』1875年11月13日土曜日、「文学ゴシップ」、p. 642を見よ。英文テキスト、後出、p. 83.
- 2) 『行動と言葉』の3巻は、第1巻、第2巻が1875年に、第3巻が1876年に、ミシェル・レヴィ社から刊行される。各巻には序文が付せられ、序文は小冊子の形でも別に出版された。第1巻の序文は「権利と法」と題され、第3巻の序文は「パリとローマ」という題である。
- 3) マラルメが「反サント=ブーヴ」ではないように見えるということに注目しよう。

## 訳者後記

本稿は、マラルメが、イギリスの週刊文芸誌『アシニアム』*Athenaeum*に掲載すべく、当代フランス、とりわけ首都パリの芸術シーンをイギリス人向けに紹介する記事を、書簡の形で友人アーサー・オショネシー Arthur O'Shaughnessy に送ったフランス語原稿そのものの翻訳である。前回は、その受け取り手であるオショネシーが英語に摘訳して、同誌の「ゴシップ」記事に挿入した一節を集めたものを訳出した。両者を比較することでオショネシーの手付き、というか彼の取舍選択並びに解釈が明らかになる。が、これは同時にマラルメのテキストの読まれ方の一例を見ることにもなるだろう。原稿は忠実に逐語訳に近い英訳がなされている部分と、パラフレーズされたもの、さらにはオショネシーの解釈で改変され、縮められたものなど各種に及んでいることが確認できる。中にはマラルメの難解な書き方を解釈しかねていのではないかと疑われる部分も散見される。いずれにせよ、この小論は、マラルメという存在がイギリスにおいて、どのように扱われたかを窺い知ることのできる資料の一つとなろう。

底本にしたテキストは以下の通りである。

1. Mallarmé, *Œuvres complètes*, II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, pp. 416–440, 1698–1702. [今回訳出したのは、pp. 416–421, 1698–1699.]

2. Les *gossips* de Mallarmé, *Athenaeum* 1875–1876, textes inédits, présentés et annotés pas Henri Mondor et Lloyd James Austin, Paris : Gallimard, 1962, pp. 19–75. [今回訳出したのは、pp. 19–28.]

前回底本として用いた単行本である 2. に付された通し番号を付けた。これは、今回訳出したマラルメの書いたフランス語テキストと、前回訳した『アシニーアム』誌掲載の英文記事との照合関係を明らかにするのを容易ならしめるためである。但し、1. の新プレイアード版編者が新たに発見し加えたテキストには、私が「0」の記号を補った。

尚、各番号の次に付した日付は、前者がマラルメが記事を送った時点を、後者が実際に『アシニーアム』誌に掲載された号の発刊日を表す。原註は算用数字で示し、訳註はアルファベットで記してある。但し、新プレイアード版全集は、各ページ毎に註の番号が改まっているので、翻訳の都合上、これを踏襲することはできず、底本とは異なる番号が付されている。両底本の註の内容に重複がある場合は、より詳しい単行本 2. の註を優先した。

私としては、これまでも強調してきたように、読者として想定しているのは、日本の数少ないマラルメ研究に携わる人たちであり、各位には原文を片手に検証していただき、誤りの指摘やさらなる詳細を寄せていただくことを期待するものである。

本紀要 51 号訂正

p. 49 3 行目 妹 (誤) → 尼僧 (正)

p. 50 26 行目 アンリ (誤) → ヘンリー (正)